

米国での川下りの旅

去る六月、米国政府の招聘により一か月間アメリカを訪問する機会が与えられた。滞在期間の大半は政府機関、大学、研究所などを訪問して仕事の関連で討議することに充てられたが、それ以外に、何か普通には経験できないようなことをひとつだけ行つてもよいとされた。私は、アメリカの大自然を肌で感じてみるため、峡谷の底を流れる川をゴムボートで旅することを希望として申出たところ、幸いにもこれがかなえられることとなった。その川は、急流が多く、ひとたび下れば上流には再び戻り難いという意味で「帰らざる川」という通称で知られている川（アイダホ州所在のサーモン川）であった。この川下りは、大型のゴムボートに食料品、キャンプ用テントなどを積み込んでいく旅であり、専門ガイド付きの五日間にわたるものである。ぬけるような青空、兩岸にそびえる岩壁、目を樂しませてくれる原生林、そして鹿など野生動物の群も時々みかける。川は雪どけ水を集めてとうとうと流れており、荒々しい溪流に差しかかる毎にびしょぬ

れになる（もちろんそれに備えた服装はしているが）。単に川下りとはいっても、それは旅行距離にして約百四十キロもあり、まさにアメリカ的な雄大な川旅であった。

同じような景色を連日ながめてばかりいるのでは、幾分飽きてくるのではないかという心配が実は当初なくはなかった。しかしそれは杞憂に終わった。仕事のスケジュールや電話に追われることもなく、また新聞、テレビなど現代の文明生活からも解放されて大自然に親しむのは大いなる保養であり、また、まことに贅沢なことであった。ちなみに、米国のブッシュ副大統領は昨年この川で同様の旅を楽しんだ由である。この旅が特に思い出深かったのは、いまひとつには自然保護の精神の下にそれが実施された点にある。ゴミはもとより、キャンプ・ファイヤーの灰に至るまですべて持ち帰る方針が採られており（トイレもポータブル器を携行してこれを利用）、自然は、後世代も含め共通の財産という考え方が実行されていたのは実にすがすがしかった。自然の美しさは、結局、人の心によって引出される面もあるのではないだろうか。

（香川県東讃タウン誌「だんDAN」3号、昭和六十一年十月）